

遺伝子は 環境によって目を覚ます

ーイキイキ、ワクワク生きるー

村上 和雄

聞き手：佐多保彦 株式会社東機貿 代表取締役社長



佐多：1月の講演会で初めて先生のお話を伺いましたが、人間の持つ遺伝子の90～95%位は眠っているが、「イキイキ、ワクワク、感動しそして喜びながら生きる」とその眠っている遺伝子がON（オン）になって働き出す、というお話には感動しました。つまり、いよいよ心と身体の関係が、遺伝子を媒介に、科学的に解明される21世紀を迎えるというわけですね。

村上：体重1kg当り1兆個といいますが、体重60kgの人間は約60兆個の細胞からできています。そしてそのどの細胞も全く同じ遺伝子を持っているのですが、心臓の細胞は心臓で、髪の毛の細胞は髪の毛です。決して心臓の細胞が髪の毛になって、心臓に毛が生えたりはしません。これは、その場所、場所で必要な遺伝子だけのスイッチがオンになって、他の遺伝子はオフになっているからです。最近の研究から「遺伝子の働きは、それを取り巻く環境や外からの刺激によって変わる」ことが明らかになってきました。遺伝子はたくさんの可能性を秘めたまま眠っているのです。眠っているよい遺伝子のスイッチをオンにし、悪い遺伝子のスイッチをオフにできれば、私たちの可能性は何倍、何十倍になるかもしれません。親の遺伝だから仕方がないということはないのです。日常生活をはつらつと前向きに、「イキイキ、ワクワク」する生き方がいい遺伝子をオンにします。その為にはもっともっと「感動する」ことです。つまり、どんな心を使えば良い遺伝子が働き出すかに、もっともっと関心を持たねばなりません。

佐多：先生のように世界的な業績を残される方は、初めから必要な遺伝子のスイッチがオンだったのでしょうか？

村上：とんでもない。私は京都大学で農芸化学を学びましたが、出来の悪い学生で、私の研究が認められ始めた頃、昔の同輩たちは口を揃えて「あの村上がねエ」といっていたそうです。そんな私が研究者を目指そうとしたのは、平澤先生との出会いがあったからです。平澤先生は、京都大学総長を務められた立派な方で、湯川秀樹先生の親友でもありました。その先生が学生時代に劣等感でノイローゼになられ故郷で療養していたとき、突然ベートーベンの「自戒の言葉」が幻聴で聞こえてきたというのです。このベートーベンの声を聞いた平澤先生は、雷にでも打たれたように目が覚めて、ノイローゼが一遍で治ってしまったのです。感動によって

元気になる遺伝子が瞬時に働いたということもできると思います。平澤先生のこうした体験が、私に大きな感動を与えてくれました。そして、私に研究者を目指す決意をさせてくれました。

佐多：平澤先生との出会いが、村上先生の遺伝子をオンにしたのですね。

村上：さらに私の研究者としての遺伝子をオンしてくれたのは、アメリカでの研究生活でした。着いた当初は英語が全くできず、食事に招待された教授のお宅の犬を見て、しゃべる方はともかくヒアリングなら、この犬の方が私よりできるだろうと悲しくなった程でした。しかし、アメリカのフェアな研究環境が私に合って、私の研究者としてのスイッチがオンになりました。当時私は20代の駆け出し研究者でしたが、隣のアパートに住んでいた55、6歳の日本人の教授の給料と同じでした。日本で教授と駆け出し研究者というのは、殿様と家来のようなものです。私はびくびくして上司の教授に尋ねますと「日本でのことは知らないが、アメリカではあの教授とお前は大体同じような仕事しかできない。同じ仕事には同じ給料、これがフェアだ」といいました。つまり何十年かの経験を無視して「今、なんぼ」という評価をする世界でした。

佐多：私も出会いというものを偶然ではなく必然であると考え、大切にしていますが、先生も数多くの出会いに助けられておられるそうですね。

村上：私の生涯の研究テーマのレニン是人を高血圧にする酵素ですが、レニンに出会えたのも、コーエン教授という風変わった学者との出会いのお陰でした。コーエン先生は後にノーベル賞を受賞されましたが、その当時でもかなりの年配で、鳴かず飛ばずの状態でした。おまけに先生との1年にわたる共同研究も、全くの徒勞に終わるという情けないものでした。しかし、人生の出会いの不思議はそういうときにあるもので、コーエン先生の研究を手伝ったお陰で、私はレニンに出会ったのです。

佐多：そして世界で初めてヒトのレニンの遺伝子解読に成功されましたが、そのときも信じられないような出会いに助けられて、パスツール研究所に逆転勝利されたのでしたね。

村上：私がヒトのレニンの遺伝子解読を始めようとしたときに、フランスのパスツール研究所が、既に完了間近という情報が入って



村上 和雄 / むらかみ・かずお

1936年生まれ

1963年：京都大学大学院農学研究科農芸化学博士課程終了

アメリカ・オレゴン医科大学研究員、その後京都大学農学部助手、バンダビルト大学医学部助教授

1978年：筑波大学応用生物化学系教授

1983年：高血圧の黒幕である酵素「レニン」の遺伝子解読に成功、世界的な業績として注目を集める

1994年：先端学際領域研究センター長

1996年：日本学士院賞受賞

現在、筑波大学名誉教授

きました。私は直ぐにパスツール研究所に飛んで、顔見知りの研究者に進捗状況を聞いてみましたが、8割方解読が済んでいるので、「ヒトではなくサルでやったらどうですか」と言われてしまいました。「こんなくしょう！」と悔しさでいっぱいでしたが、状況は絶望的でした。ところが、その後回ったドイツの大学町ハイデルベルクの酒場の片隅で「いまさらサルでやっても」と1人悩んでいたときに、偶然、新進気鋭の遺伝子工学の第一人者、京都大学医学部の中西教授に出会いました。そして、中西先生は「遺伝子の解読というのは9割9分できていても、最後の1分でつまずきどうしても完成できないことがあります。あきらめない方がいい、全面的に協力するので絶対ヒトでやりなさい」と言ってくれたのです。研究の世界は人の足を引っ張る人はいても、協力しようというのは希有のことなのです。中西先生が好意的な反応を示されたのは、私にまだ旺盛な闘争心と、やる気があったからでしょう。求めていると「出会い」が来るという不思議な現象があるのです。

佐多：前向きの気持ちで、出会いを呼び込むんですね。先生は遺伝子の研究をされていて、偶然を超えた何かの存在に気付かれたそうですね。

村上：遺伝子というのは、生きとし生けるもの全て、即ち、細菌から植物、昆虫、動物、人間まで、全く同じA・T・C・Gという4つの化学の文字で表されます。これは凄いことです。生き物は全て共通の辞書を使っているのです。しかし、人間の生命が生まれるという確率は「1億円の宝くじに百万回当たる」くらいの確率なのです。別の言い方をすれば、偶然ではあり得ないのです。私はそこになにか偉大な力の働きを感じます。私はそれを「サムシング・グレート」と呼んでいます。「神」を信じる方はそれを「神」と呼び、「仏」を信じる方は「仏」と呼び、神仏を信じない方にとっては、「自然の力」ということになるのでしょうか、人間業ではない働きがあることは間違いありません。私は遺伝子の研究を通じてそのことに気が付いたのです。

佐多：我々は結局「生かされている存在」つまり「生かされて有る」のだということを忘れず、謙虚な心構えで健康に関わる仕事をして行こうと、会社の経営理念を「生命力」としています。先生のおっしゃる「サムシング・グレート」の存在を私も信じます。こう申し

上げると大変失礼ですが、なぜ今頃になって、そのことを特に強く言われたのでしょうか？

村上：私ももちろん一般人としては気付いていたのですが、遺伝子工学の現場の科学者として再発見したといった方がいいでしょう。私たちは遺伝子の解読に全力を上げているのですが、よくよく考えてみると「それを書いた人がいる」と本当に畏敬の念を持って感じ入っているのです。科学する者は逆に気付かなくなる方が多いと思いますが、その科学者として気付いたのです。一般の人は科学を絶対的に信頼していますが、科学の真理は絶対的な真理ではなく、一定の条件下での一面的真理なのです。条件が変われば真理も変わります。一般の人の「科学的真理は絶対」という科学に対する誤解を解いていくのも科学者としての責任だと思っています。例えば、ダーウィンの進化論も絶対ではありません。

佐多：私も笑われるかもしれませんが、進化論に疑問を持っていました。猿から人間になったとはとても思えないのです。

村上：ダーウィンは「自然界を支配する原理は人間も動物も自然淘汰と適者生存である」としていますが、そうでない例も沢山あります。近代社会は弱肉強食をもとに出発し、一部の強いエゴを許したので、便利で快適の反面、公害や環境破壊が大規模に進み、地球生命が危くなりました。「共生」の思想こそ根本原理ではないのでしょうか？「どこかおかしい」と、ダーウィンとは別の考えが発表されるのは当然です。私も猿が言わば偶然に人間に進化したとするダーウィンの説には賛成できません。私は2年ほど前に筑波大学を定年退官しました。これからは生命の不思議、素晴らしさを多くの人に知らせることをしてゆきたいと思っています。

佐多：私の尊敬するチベット仏教のマチュ・リカル師はパスツール研究所で博士号を取得された生化学者でしたが、32才のときに出家して、ダライ・ラマの弟子になりました。いつか先生にぜひご紹介したいものです。

村上：今まで「大学と産業の仲人」をしてきましたので、これからは「科学と精神世界の仲人」をやりたいと思っています。つまり人間らしさと科学をどう結び付けるか、というテーマを追い続けたいのです。

20世紀はスワン・ガンツカテーテル そして21世紀は?

- PiCCO(連続心拍出量測定装置)モニター -

尾崎 眞

はじめに

重症患者における心血管系モニタリングについては、論議を呼ぶ話題です。現在のところ、動脈圧モニタリングに加えて、スワン・ガンツカテーテルを用いることが定番になっていますが、どんなパラメータこそがモニターすべき必要なものであるか確立した結論がありません。どんな情報が有用であり、必要なものだという共通意見が欠如しているために、モニター計測上の利点・欠点の評価がどんなに最高のものを求めても、それでよいという結論が出ないのです。このことは、スワン・ガンツカテーテルを挿入した上での患者管理により、集中治療室での患者救命率が、必ずしも向上していないというJAMA(The Journal of the American Medical Association)の報告でも裏付けられています。

圧評価から容積評価への転換

仮に心臓への前負荷を中心静脈圧(CVP)または肺動脈閉塞圧計測により、予測するのだとしますと、血管内圧が血管内容量に等しいという仮定がなされています。しかしこのことは極めてまれな状況なのです。

充満圧を用いることで循環血液量の評価を行うことはどう考えても信頼性に欠けます。この事実を示すために、中心静脈圧と肺動脈閉塞圧を胸腔内血液量と左室拡張終期容量係数と比較してみました。全身性炎症反応症候群(SIRS)を呈している、血行動態が不安定な患者における中心静脈圧と肺動脈閉塞圧は、胸腔内血液量と左室拡張終期容量係数とはまったく相関しませんでした。それに引き続き研究においても胸腔内血液量係数と心臓拡張末期総容量係数は、心係数や一回拍出量係数の変化と極めてよく相関することが証明されています。

中心静脈圧と肺動脈閉塞圧を「患者さんに特化した」輸液療法に用いる妥当性はありません。胸腔内血液容量こそが、心係数と一回拍出量係数の変動に対する直接的な相関で示された通り、前負荷を示す鋭敏な指標なのです。

胸腔内血液量は、肺血液量と心臓拡張末期総容量とから成り立っていますが、心臓拡張末期総容量とは、図示しますと心臓の4つの腔の合計の容量です(図1)。

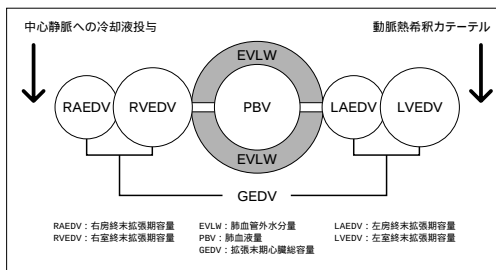


図1: GEDVは心係数と相関

心機能係数は心拍出量を心臓拡張末期総容量で除した割合です。心機能係数は、前負荷とは独立した収縮能に強く関係した変数です。心機能係数は、血管作動薬と陽性変力作用薬の補助を行う上で有用なパラメータです。

ドイツPULSION Medical Systems社製のPiCCOを用いることにより、心臓拡張末期総容量を定量化し、そして胸腔内血液量と血管外肺水分量を予測することができます。

血管外肺水分EVLWとは?

血管外肺水分は、疾病率や死亡率に直接関連してきます。毛細血管からの漏出が起きた場合に肺におけるガス交換にどんな障害が生じてくるかを認識していれば、血管外水分の病態生理学的な重要性は明白なことでありましょう。様々な形のショックと同じように、SIRSの際にも、肺血管における透過性の問題が結果として通常生じてくるのでした。このように、血管外肺水分の決定・評価はショック、急性呼吸窮迫症候群(ARDS)、SIRSなどにおける輸液管理に極めて有用であると考えられています。肺における血管外肺水分量の増加は、漏出した水の重さが加わった分を今までの肺の重さだけでなく毎呼吸持ち上げなくてはならないために、呼吸仕事量の増加につながります。成人の正常な血管外肺水分の正常値は、400mlから最大2000mlまたはそれ以上までになる場合があるようです。このことが患者がなぜ人工呼吸管理されなくてはならないかのひとつの理由と考えられます。血管外肺水分量を減少させることで、集中治療室滞在期間短縮や器械的換気を短

尾崎 眞 / おさき・まこと
 1954年 沖縄首里に生まれる
 1981年 旭川医科大学医学部卒業
 1981年 東京女子医大麻酔科研修医
 1983年 東京女子医大麻酔科助手
 1992年 カリフォルニア大学サンフランシスコ校 麻酔科リサーチフェロー
 1994年 東京女子医大麻酔科講師
 1998年 東京女子医大麻酔科助教授
 2000年 東京女子医大麻酔科主任教授
 中心となる専門分野は、
 (1)麻酔と体温調節機構
 (2)麻酔・集中治療とモニタリング
 (3)医療におけるコンピュータ利用

く済ませることが可能だそうです。

血管外肺水分EVLWを増加させるものに、静水力学的な因子があります。これらの因子は、胸腔内血管容量ITBVを増加させるので把握することもできるのですが、患者の輸液量のインとアウトの割合を調節することで制御可能です。従いまして、輸液投与と排出割合をいじることで、EVLWを減らすことが可能なのです。ITBVを「正常値」以下にしてしまいますと、EVLWはそれ以上に減少のしようがありません(図2)。すなわち、ITBVは心臓前負荷の指標として「正常値」以下に減らしてはならないのです。心拍出量と酸素供給が陽性変力作用薬・血管作動薬の補助のもとに維持されていたとしても、ITBV減少の結果、例えば致命的な臓器低循環などが引き起こされてくるのです。

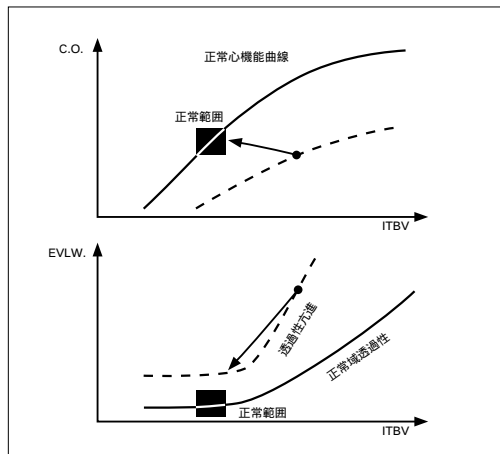


図2：血管外肺水分と胸腔内血液量の2つのパラメータを用いた患者管理法

PiCCOの構成(図3)そして利点

PiCCOを使うことで、また経済的にも節約しつつ熱希釈式により心拍出量も測定することが可能です。測定は等張な生理食塩水またはブドウ糖液を1回注入で、どんな種類でもかまわないのですから中心静脈カテーテルから投与します。熱希釈の状況が特別開発されたサーミスタにより検出されます。サーミスタは、大腿動脈

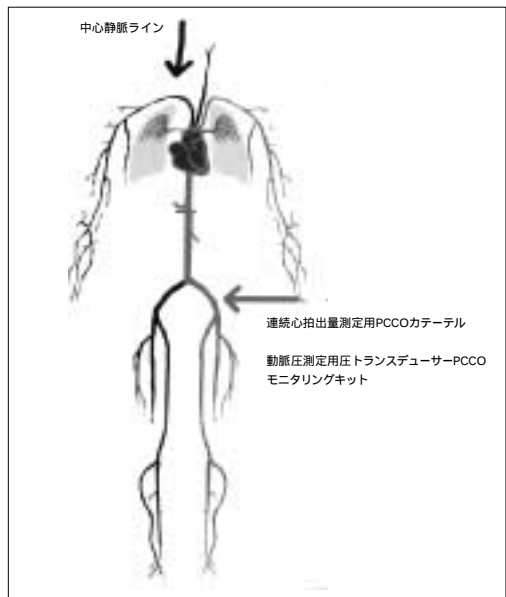


図3：PiCCOの構成

や上腕動脈などの太目の動脈に留置されたカテーテル内に仕込まれています。肺循環を介した熱希釈心拍出量測定法は、脈波伝播式心拍出量測定(pulse contour cardiac output = PCCO)の較正時の参考値としてもまた使用されています。この較正は、熱希釈による心拍出量測定が行われるたびになされているのです。肺動脈カテーテルとは異なり、PiCCOによる測定は心臓、弁、肺血管に侵襲を加えません。PiCCOは、低侵襲、低リスクなのです。

21世紀へ向かう工学技術を結集した結果、PiCCOは「脈の触診」で得られた情報を連続的心拍出量測定まで変換して持ってくることを可能としました。そして更に、表1に示した要素を自動的に計算して、提供してくれるのです。集中治療室勤務のあなたが常に知りたいことは、いつでも身体への点滴・輸液・輸血療法に反応する身体への適切容量のことであり、血圧測定だけではまったく不明なことばかりです。何が必要なのか？それはPiCCOが教えてくれます。

表1：PiCCOによる連続モニタパラメータ一覧

PiCCOは下記のパラメータを連続的にモニターします	
圧波形解析による連続心拍出量	PCCO
心拍数	HR
動脈圧	AP
一回拍出量/一回拍出量変動	SV/SVV
体血管抵抗	SVR

PiCCOは下記の容量情報を測定します	
拡張末期心臓血液総容量	GEDV
心機能係数	CFI
胸腔内血液量	ITBV
肺血管外水分量	EVLW

閉塞型睡眠時無呼吸症候群 (OSAHS)における 持続陽圧呼吸(CPAP)療法

山口 祐司



1. はじめに

閉塞型睡眠時無呼吸症候群(Obstructive Sleep Apnea-Hypopnea Syndrome: OSAHS)は、睡眠障害の中でも精神生理性不眠(ストレス性不眠)を除けば最も頻度の高い疾患である。日本における有病率の調査結果は、大規模に施行されたものは多くないが、中年男性の4~5%、女性はその1/2~1/10であると考えられている(注1)。日本全体では約200万人以上の患者が存在していると推定されているが、正確な診断及び治療を受けている人は現時点で数千人にとどまっている。OSAHSは下顎の成長不全や肥満の増加などの理由でその患者数が今後増加することが予想されている。OSAHSの患者自身は自覚症状に乏しく日常生活や仕事において極度な支障を自覚していない。また、睡眠呼吸障害専門の診療機関が極めて少ないこともあり、OSAHS患者が非常に多数存在しているにも拘わらず、スリープセンターへの受診が少ないのが現状である(注2)。しかし、OSAHSなどの睡眠呼吸障害は、医学的合併症(特に血管障害)の治療とその時間的・経済的損失、交通事故、企業における生産性低下、個人の収入低下や失業(リストラ)、平均余命の短縮、国民医療費負担の増加、「いびき」・「無呼吸」による家庭内トラブル、インポテンツなどの性的問題など個人的のみならず社会的にも大きな損失を引き起こしている。

2. 睡眠時無呼吸症候群の病態と臨床症状

睡眠時無呼吸症候群患者は、様々な臨床症状を呈している(図1)。

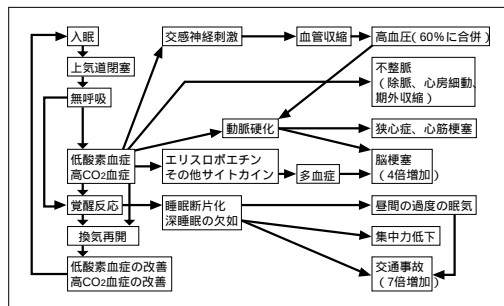


図1: 睡眠時無呼吸症候群の病態

睡眠時無呼吸症候群の病態は図1に示されるように、自覚的には昼間の過度の眠気が主症状である。睡眠時に気道が閉塞すると、低酸素血症及び高炭酸ガス血症が出現し、その刺激により呼吸中枢が刺激され脳が覚醒する。この結果、睡眠が分断され(睡眠断片化: 図1)脳の十分な睡眠がとれなくなり、集中力や運動能力が低下し交通事故の発生率が約7倍高くなる。一方、低酸素血症が持続することにより交感神経が刺激され、高血圧の合併が高くなる(注3、注4)。このような結果、動脈硬化症が進捗し狭心症や心筋梗塞などの虚血性心疾患の発症が増加する。更に、低酸素血症が原因で多血症が出現し、血管閉塞が起こりやすくなりその為脳梗塞の発生が4倍増加するという研究結果が報告されている(注5)。以上の臨床症状の出現により多くの睡眠時無呼吸患者は様々な自覚症状を訴え多くの診療科を受診している(図2)。

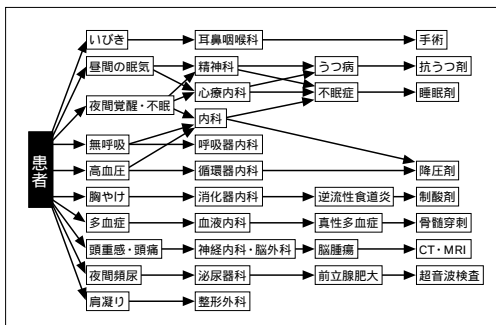


図2: 睡眠時無呼吸患者の受診する診療科

しかし、様々な診療科を受診しても睡眠時無呼吸症候群の病態の認識が医療関係者に乏しく、的確に診断され又は疑われて睡眠呼吸障害専門クリニックへ紹介されることは稀である。

3. 閉塞型睡眠時無呼吸症候群(OSAHS)の治療

OSAHSの治療法は、生活習慣の変更(禁煙・減量などの睡眠衛生(行動療法)、歯科器具(マウスピース)、外科療法(口蓋垂軟口蓋咽喉頭頭形術: Uvulopalatopharyngoplasty; UPPP)、そして経鼻的持続陽圧呼吸療法(nasal Continuous Positive Airway

山口 祐司 / やまぐち・ゆうじ
 1953年 福岡市生まれ
 1979年 自治医科大学卒業
 2年間臨床研修(国家公務員共済連合会浜の町病院)後、
 7年間公立病院勤務、自治医科大学講師、
 ハーバード大学医学部、ベイスラエル病院(1991～1993年)、熊本大学講師
 1999年 医療法人仁愛会理事
 2000年1月 福岡浦添クリニック開設(院長)

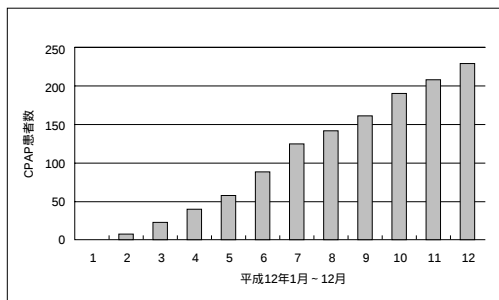


図4：当院のCPAP治療患者総数の推移
 (平成12年1月～平成12年12月)

Pressure: CPAP)がある。治療方針は、単純性いびき及び軽度のOSAHS患者に対しては歯科装具(下顎を前方へ突出させるマウスピース)による治療を行なう。中等症～重症OSAHS患者に対してはCPAP治療が第一選択である。又、若年者で口蓋扁桃肥大又はアデノイド肥大が存在する患者に対しては、UPPPの手術を行なう。咽頭部のレーザー治療はいびきに対しては効果がある場合があるが、OSAHSの治療には効果は期待できない。

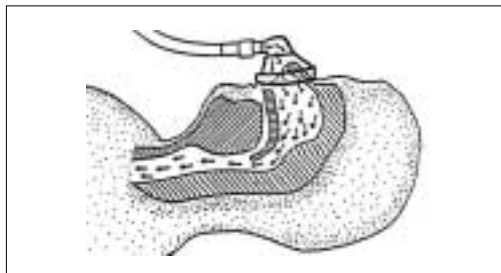


図3 CPAPの原理

CPAP治療は、マスクにより経鼻的に連続的に陽圧をかけることにより上気道虚脱を防ぎ、気道の開存を維持する(図3)。1981年にSullivanらがOSAHSの治療として報告して以来世界中にその有効性が確立しており、現在では世界的にも睡眠時無呼吸症候群における第一選択の治療法となっている。しかし、日本においてはCPAP治療を受けていないIOSAHS患者が多く放置されている。

我々のクリニックは約1年前に設立されたが、昨年のCPAP治療患者の増加率は非常に大きく、この1年間で約260人の患者にCPAP治療を行なっている(図4)。今後もこのCPAP治療患者は年々増加していくものと思われる。おそらく、CPAP治療は医療に残された重要で大きな領域と考えられる。そのため、多くのCPAP販売会社は積極的にその販売に力を注いでおり、実際、ある大手企業は日本のCPAPシェアの50%を目指すことを新聞で発表している。当院では、OSAHS治療に対して1種類のCPAP機器だけを使用することはせずに各社各々のCPAP機器(6種類)を使用している。理由は1社のみ50%以上のシェアを独占すると、日本の睡眠呼吸障害のレベルが低下すると思われるからである。確かに、1社のみと契約

して安く仕入れれば経営的には非常に楽にはなるが、やはり各社が競争して良い機械を開発することが日本の睡眠呼吸障害治療のレベルアップにつながると思われるからである。これらのCPAP機器の中でFisher & Paykel Healthcare社のHC200は現在発売されている中で唯一の加温加湿器付きCPAPである。鼻腔及び喉の乾燥や空気を冷たく感じるという患者に対してHC200を使用しているが、患者のこの機械に対する評判は良くコンプライアンスも非常に良い。特に、福岡地方は日本海側気候で冬は乾燥し気温も低下するので、このHC200は種々の症状を訴える患者さんには好評である。

4. おわりに

睡眠センターが600以上設置され睡眠医療に関して日本よりはるかに進んでいるアメリカでさえ、市民や医療関係者の人達の睡眠呼吸障害診療の重要性の認識が不足していると考えられている。実際アメリカ睡眠時無呼吸財団のホームページには、大多数の患者が放置されたままであると書かれている。日本においても睡眠医学が若い学問であるために、医療関係者及び一般大衆も睡眠呼吸障害・不眠症などの知識が十分でなく、睡眠が健康や社会的安全に深く関わっている大切なものであると認識している人は少ない。医療体制としては、日本はアメリカに比べて非常に深刻な状況である。

今後、睡眠医学の専門医や研究者を増やし、診療及び研究体制を確立させ、その恩恵を社会に還元することが緊急の課題である。

文献

- 注1) 太田保世：わが国の有病率と症状(p16-p25)、睡眠時無呼吸症候群pp127, 本間日臣編 東京 克誠堂出版、1996
- 注2) 名倉村 博、兼島 洋、山口祐司：睡眠時無呼吸症候群日本医事新報 3974: 43-48, 2000
- 注3) Peppard PE, Young T, Palta M, and Skatrud J: Prospective study of the association between sleep-disordered breathing and hypertension. N. Engl. J. Med. 343: 1378-1384, 2000
- 注4) Nieto FJ, Young TB, Lind BK, Shahar E, Samet JM, Redline S, D'Agostina RB, Newman AB, Lebowitz MD, Pickering TG: Association of sleep-disordered breathing, sleep apnea, and hypertension in a large community-based study. Sleep Heart Health Study. JAMA 283: 1829-1836, 2000
- 注5) Wake-up America: A national sleep alert, vol 1. Executive Summary and Executive Report, 1993
- 注6) 名倉村 博、加根村 隆、兼島 洋、山口祐司：本邦における睡眠呼吸障害センターの現状と問題点. 日本臨床 58: 164-169, 2000

次の時代に 残すもの(1)

イートン校からの留学生

昨年11月に、イートン校から駒場東邦中・高校(駒東)に留学中のルパート・カールトン・ジョーンズ君が弊社に訪した。ジョーンズ君は昨年夏にイートン校を卒業し、今年秋からケンブリッジ大学で医学を勉強する予定だが、イートン校と駒東との交換留学制度を利用し、2ヶ月間短期留学した。留学を終えて帰国に際し、駒東OBとして交換留学制度を創設支援してきた、弊社社長佐多を表敬訪問したもの。

イートン校はイギリス紳士の養成で名高いパブリック・スクール(注1)の一つだが、最も古い歴史を誇っており、イギリス南部ウィンザー近郊に、ヘンリー6世王によって1440年に創立された。「ワートルローの戦勝(注2)はイートン校の校庭において獲得された」というウェリントン公の言葉で有名。イートン校に代表されるパブリック・スクールの教育は、知的な鍛錬とともに、精神と肉体の鍛錬も重視し同時に行っている。日本の私立学校でもパブリック・スクールの教育を範としているところが多い。

駒東は1957年に学校法人東邦大学が世田谷区の現在地に設立した。東邦大学の理事長兼学長であった額田豊博士と、都立日比谷高校長であった菊地龍道氏が教育の理想を実現するため、又、当時の日本の貧しさから脱却するためには青少年に明るい夢を持たせ、科学的精神に支えられた合理的な考え方を教えるなければならない、という考えに立って、資源のない日本では頭脳の資源化こそ急務である、という理念のもとに設立された。

佐多は、従業員500人の内、4割が非日本人であるという日系企業としてはユニークな多国籍企業である弊社を作り上げていく過程に於て、日本人として国際社会にてどのような価値観を、あるいは国際感覚をもって仕事をしていくべきかということに、関心を持つようになった。そして「やはり若いうちにできるだけ早く外国を見た方が良い」という結論にたどり着く。その一方、アメリカの若者に日本を知らしむべきだと痛感させられたことがあった。実はそれが佐多に交換留学制度を設立支援するきっかけになった。それは、佐多が1973年にカリフォルニア州ニューポートビーチ市に子会社を設立し事業展開をしていた関係で、地元の中学校の生徒達を前に2時間程話す機会があったが、世界地図を前に佐多が話し始めると、一番前に座っていた女の子が手を上げるので何か



と思えば、「Where is Japan?」と質問したことだった。

日本や外国の若い人達に「百聞は一見に如かず」のチャンスを与え国際感覚を持たせることが必要である。その為に自分ができることとして、恩師の遅澤真也先生に相談に伺い、結果、日米交換留学制度がスタートすることになった。その後、この制度が極端ではあるが自分が死んでも永く続くようにと佐多は考え、母校駒東の母体である東邦大学の理事と交渉し、まとまった資金を個人的に提供し「留学生基金」が1986年1月に設立された。その基金が駒東のその後の交換留学制度を支えている。

佐多が申し出て始まったアメリカの高校との交換留学制度が10年を迎えたのを機会に、1987年にイートン校との交換留学制度を進言し、当時の三井銀行ロンドン副支店長西川永幹氏と佐多のついで、日本の中学・高校としては初めて実現・スタートすることができた。パブリックスクールでの学生生活を書いた本で、戦後の名著の一つに数えられている「自由と規律」(注3)に佐多自身が母校在校時に大きな感銘を受け、イギリスのパブリック・スクールの教育こそが学校教育の理想であると信じていることも、イートン校との留学制度を進めた理由の一つである。現在までに日本からアメリカへ23名、イギリスへ13名を派遣、アメリカから23名、イギリスから11名を受け入れ、合計70名の国際交流となっている。

さてジョーンズ君の留学の感想だが、「駒東は自由な校風で、生徒がのびのびと学生生活を送っていました。皆マナーが良く、勉強熱心でフレンドリーでした。先生方もとても親切で、2ヶ月間、快適な学校生活を過ごせました。渋谷の街も活気に溢れています。ラッシュアワーの地下鉄の混雑にはびっくりしました。留学はとてもいい経験でした。この貴重な経験の機会を下さった佐多さんに厚くお礼を申し上げます」とのこと。ジョーンズ君が将来、知日家・親日家の一人として、日本・イギリスの交流に大きく貢献してくれることを期待したい。

(注1) パブリック・スクール: イギリス支配階級子弟の教育機関。「パブリック(公立)」と言いながら私立学校。日本の中学校と高等学校を合わせたものにほぼ相当。

(注2) ワートルロー: 1815年、イギリスのウェリントン公ひきいるイギリス・プロイセン連合軍が、ナポレオン軍を撃破したブラッセルの南にある古戦場。

(注3) 池田潔著「自由と規律」――イギリスの学校生活――(岩波新書)

高木仁三郎さんを 偲ぶ会

市民科学者の逝去を悼む

昨年12月10日、東京日比谷公会堂において「高木仁三郎さんを偲ぶ会」が行われた。当日は公会堂の前に参列者の長い列ができ、偲ぶ会開始後も参列者は増え続け、最終的には2千人以上の人々が参列した。会場を埋め尽くす人に圧倒されながら、改めて高木さんの人望と偉業が実感された。

高木さんご自身がこの偲ぶ会の為に、死の直前に病床で走り書きされたという「友へ」と題されたメッセージが代読されると、場内はしんと静まり返り、参列者がその最期の言葉に神経を集中し、耳を傾けていることが感じ取れた。メッセージが読み終わられると、天国の高木さんに届けといわんばかりの、割れるような拍手が公会堂中に響きわたった。そのメッセージを引用させて戴く(一部割愛)。

「まず皆さん、ほんとうに長いことありがとうございました。体制内のごく標準的な一科学者として一生を終わっても何の不思議もない人間を、多くの方たちが暖かい手を差しのべて鍛え直してくれました。それによってとにかくも『反原発の市民科学者』としての一生を貫徹することができました。

反原発に生きることは、苦しいこともありましたが、全国、全世界に真摯に生きる人々と共にあることと、歴史の大道に沿って歩んでいることの確信から来る喜びは、小さな困難などをはるかに超えるものとして、いつも私を前に向かって進めてくれました。幸いにして私は、ライト・ライブリフト賞を始め、いくつかの賞に恵まれることになりましたが、繰り返し言って来たように、多くの志を共にする人たちと分かち合うべきものとしての受賞でした。

残念ながら、原子力最後の日は見ることができず、私の方が先に逝かねばならなくなりましたが、せめて『プルトニウムの最後の日』くらいは、目にしたかったです。でもそれはもう時間の問題でしょう。すでにあらゆる事実が、私たちの主張が正しかったことを示しています。なお、亲眼できないのは、この末期症状の中で、巨大な事故や不正が原子力の世界を襲う危険でしょう。JCO事故からロシア原潜事故までのこの1年間を考えると、原子力時代の末期症状による大事故の危険と結局は放射性廃棄物が垂れ流しになっていくのではないかということに対する危惧の念は、今、先に逝ってしまう人間の心を最も悩ますものです。



後に残る人々が、歴史を見通す透徹した知力と、大胆に現実に立ち向かう活潑な行動力をもって、一刻も早く原子力の時代にピリオドをつけ、その賢明な結論に英知を結集されることを願ってやみません。私はどこかで、必ず、その皆さまの活動を見守っていることでしょう。

私から一つだけ皆さんに願うとしたら、どうか今日を悲しい日にしないでください。泣き声や泣き顔は、私にはふさわしくありません。今日は、脱原発、反原発、そしてより平和で持続的な未来に向かっての、心新たな誓いの日、スタートの楽しい日にして皆で楽しみましょう。高木仁三郎というバカな奴もいたなど、ちょっぴり思い出してくれながら、核のない社会に向けて、皆が楽しく夢を語る。そんな日にしましょう。

いつまでも皆さんとともに 高木仁三郎

世紀末にあたり、新しい世紀をのぞみつづ

参列者によって語られた高木さんにまつわるエピソードの中にしばしば楽しかった思い出も紹介され、客席から笑い声も聞こえた。高木さんが好きだったという弦楽四重奏も演奏され、生前のご希望通りの「楽しい」偲ぶ会に、天国の高木さんもお満ちされたことと思う。

尚、市民のための科学を目指す研究者や運動家を育てたいと全財産約2千万円を遺贈した高木さんの遺志を活かし、弁護士河合弘之氏を代表とする「高木仁三郎市民科学基金」の設立委員会の発足が発表された。

あさひ銀行市ヶ谷支店 普通預金 1221981 高木基金代表

高木仁三郎 / たかぎ・じんざぶろう

在野の科学者として、日本の脱原発運動を終始リードしてきた。専門知識に裏打ちされた活動は、原子力開発を推進する国側にも一目置かれた。

1938年 群馬県生まれ

1961年 東京大学理学部卒業(65年 原子核研究所助手)

1969~73年 東京都立大学助教授

1975年 原子力資料情報館室設立

1997年 「ライト・ライブリフト(正しい暮らし)賞」受賞(注)

2000年10月8日 永眠(享年62歳、直腸ガン)

(注)平和や人権、環境など人類が今日直面する課題の解決に尽くした個人や団体に与えられる。もう一つのノーベル賞(Alternative Nobel Prize)と呼ばれる。

著書:『鳥たちの舞う時』『市民科学者として生きる』『プルトニウムの恐怖』他多数

出会い (17)

——新大久保駅事故に寄せて特別記事——

奥村 一郎



地域戦争の絶えない現代世界のなかで、なんととはなく泰平ムードの温もりの中で、引き締まらない日々を過ごしているところに、突如、目を覚まされるような涙の悲劇が起きた。正月末のこと、首都東京の山手線の一角、新大久保駅のホームから転落した人を救おうとして飛び降りた二人の男性もろとも三人が電車の下に轢きこまれて亡くなった。「愛と死」という人生における最大の問いが、我々に投げつけられたかのようであった。

生ける愛の炎
——新大久保駅事故——

1月26日(金曜)夜7時半頃、新宿駅の手前、山手線新大久保駅のホームで、酒酔いのために線路に転落した人を助けるため飛び降りた、二人の男性もろとも三人が電車に轢かれた出来事は、数日のあいだ新聞雑誌の紙面を埋めた。たまたま少し前、私は新大久保駅を通り過ぎて来たことに気付かされ、剣で胸を突き刺されたような衝撃であった。

そのころ、東京近辺ではバラバラと降り始めた雪は翌日まで止まず、稀な大雪が京浜地区を真っ白に覆った。あたかも、亡き三人の死を弔うかのように。ひとりとは日本語勉強中の韓国留学生李秀賢さん(26才)、もうひとりとは、カメラマン関根史郎さん(47才)、線路に落ちたのは坂本成晃功さん(37才)。ホームからの転落事故は毎年数10件あるものの、見知らぬ人を助けようとして、2人の人が亡くなるということは皆無であるという。(毎日新聞 2001年 2月3日 土曜日)

1. 死との出会い

確かに、命と死とは両立することも、共存することもできない。命は命、死は死、死は生との断絶である。だが、あの日、その時、この全く相反する生と死との激突から噴き上げる凄まじいまでの愛のドラマは、たちまち日本全土から韓国にまで報道され、多くの人の感動を呼び覚ました。告別式には帰国したばかりの森喜朗首相や河野洋平外相ら日本政府の要人が相次ぎ姿を見せた。一方、1月30日、李さんの遺骨が故郷の韓国、釜山に戻ると追悼ムードは頂点に達した。同日、金大中大統領は閣議で李さんを「国家有功者」に認定して、国民勲章の授与と遺族に対する補償金の支給を決定。さらに、担当秘書官を釜山に派遣して弔意を伝える、破格の礼遇を示した。さらに、李秀賢さんの記念碑の話題も取り上げられてきている。(同上毎日新聞より)

奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司叙叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりパチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンツ宗教研究所)など多数。

2. 「友のため自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」 (ヨハネ15.13)

ヨハネ福音書の中に記されているこの言葉は、ここでそのまま当てはまるように思われる。ところで、先ず「友のために」という冒頭の言葉を取り上げてみたい。李さんと関根さんの二人にとっては、坂本さんは友人でも知人でさえもなかった。全く見知らぬ他人であった。もし友であるなら、そのために自分の命を捧げてくれる人があるのも稀ではない。決して易しいこととはいえないにしても、川で溺れそうになった生徒を救おうとして、自分の命を捧げた小学校の教師もあった。宗教の場合には殉教者がある。そこにある死は、動機や目的は様々であるにせよ、いずれも、死を突破させるほど激烈な愛の明確な絆があった。そこには職務上の責任感と生徒への愛情など、また、一途の信仰や教祖への絶対的帰依などが死も怖れぬ力を与える。それに対して、あの時、偶然そこに居合わせた二人の男性に死の決断をさせたのは、親子、兄弟の血縁でもなく、師弟、あるいは、同じ信仰上の友でもなかった。そこには、前にも後ろにも、何も見えない暗黒の砂漠の死があるだけだった。民族も国家も宗教も、この世の一切の壁を越えた純粋な人間愛の極限における、いわば、尊厳死であった。すなわち、そこで愛の決断をさせたものは、今眼前の危険にある「一人の人間」というだけ。「一人の人間の価値は地球よりも重い」といわれる。そこにあるものは、単なる、幅広いヒューマンイズムの博愛主義ではない。そこでは、「この人ひとり」が、掛け替えない「唯一の人間」として受け止められた。

李さんの家族は仏教であり、関根さんは、宗教には無縁のようであった。しかし、その二人は、「人間は人間である」という一事に、無限の尊さを見たに違いない。「人間が本当に人間であるなら、どんなに美しいだろう」といった哲学者もいる。真の人間にとっては、



愛と死とは切り離せない。しかも、その愛は血縁、知縁、民族も国家も越えて、一人の人のために自分の命を捨てる大胆な勇気を与える。もう遠い思い出だが、カルメル会修道院に入るため、横浜から約1カ月の長い船旅を終えて、フランスのマルセイユ港に着いたとき、日本から届いた最初の手紙に、フランス語で書かれた修道女の言葉が思い出される。「愛と死とは同意語です」。

3. 相互愛 「私は、あなた方に新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。私があなた方を愛したように互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなた方が私の弟子であることを皆知るようになる」（ヨハネ13,34-35）

一般に、キリスト教の教えの本質は、「神の愛と隣人愛」であるといわれる。確かにそうである。しかし、正確ではない。なぜなら、その二つの掟は旧約時代のものであって新約時代のキリストの教えではないから。新約の教えは「キリストの愛と相互愛」である。古来、「山上の垂訓」といわれるキリストの教えの始めに、旧約と新約との関係が極めてはっきりと述べられている。「私が来たのは、律法や予言者を廃するためだと思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」（マタイ5,17）

「律法や予言者」とは、旧約を意味する。ということは、旧約時代の「隣人愛」の掟は「相互愛」という新しい掟によって完成されたことを意味する。つまり「私があなた方を愛したように、互いに愛し合いなさい」というのがキリストのいう「新しい掟」である。つまり、「隣人愛から相互愛へ」の移行こそが重要である。このことを極めて明確に指摘したのが、若くして世を去ったテレジアというカトリック世界の著名なフランスの聖女である。隣人愛と相互愛との相違は、その愛の対象の幅の広さの違いにあるのではなく、愛の基軸の相違にあることを聖女は指摘する。頼りにもならない自分を基準にする隣人愛ではなく、命を捨てて私達を愛して下さったキリスト自身の無限の愛が基軸となる相互愛との相違を明確に示す。さらに、聖書記者ヨハネの言葉をとってみよう。「私達が愛を知ったのは、イエスが私達のために命を捨てて下さったからです。私達も兄弟のため命を捨てなければなりません」

（Ⅰ ヨハネ3,16）

ここでの「兄弟」という言葉には、あの時、あの夜、共に葬られた三人の名が秘められていることであろう。神のうちににおいては別離に終わる死ではなく、兄弟の死によって与えられる永遠の愛との出会いがあるに違いない。

想像することもできない三人のご遺族、ご親族の悲しみと痛みをお察ししながら、この紙面を借りて、それぞれのご家族に謹んで哀悼の意を表させていただきます。

P.G.I.のお知らせ

- 石元泰博 写真展 2001年4月5日(木) - 28日(土)
「顔」 "Faces"

写真家石元がレンズを通して捉えた、「顔」にテーマを絞り、1948年の習作から2001年の近作にわたる200余点のオリジナルプリントを展示します。代表作「ある日ある所」「シカゴシカゴ」や「東京の顔」、「伝真言院両界曼荼羅」、「湖国の十一面観音」の他、数多くの街角でのスナップショットなどから、「顔」のイメージを抜粋し、構成されます。

- 小島公子 写真展 2001年5月8日(火) - 26日(土)
「私とポートレート」 "Present Portrait"

- 久保田博二 写真展 2001年6月1日(金) - 30日(土)
「アジアの映像」 "Images of Asia"

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦 4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143

JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分 [入場無料]

営業日:月-金 11:00-18:00 土 11:00-17:00

休館日:日曜日・祝日

* P.G.I. についての詳しい情報はホームページ(<http://www.pgi.ac>)をご覧ください。

表紙の写真



写真:クリス・スティーラー/バーネス
パンゴラデシュ、1989年

一 表紙へのメッセージ

人が土に種を蒔いて、
夜昼、寝起きしているうちに、
種は芽を出して成長するが、
どうしてそうなるのか、
その人は知らない。
土はひとりでに実を結ばせるのであり、
まず茎、次に穂、そしてその穂には
豊かな実ができる。

(マルコによる福音書 4章26-28節)

わが心の遍歴

(7) 現代における宗教と科学・技術の問題

花岡 永子



花岡 永子（別姓：川村 永子）/かわむら・えいこ

1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学、'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学科博士候補生コース留学、'73年同大学より神学博士(Doktor der Theologie)の学位を取得。'87年女性老練家'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化学研究科教授として哲学、宗教学を教える。

著書は『宗教哲学の根源の探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教哲学』(新教出版社、'94)、『神と宗教哲学』(北樹出版、'94)、『キルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

本誌のNo.38(6)での「脳死による臓器移植の問題」について、有り難くも読者の皆様から色々ご意見を頂いた。それで、現代の大きな問題の1つである科学・技術と宗教あるいは宗教哲学との関係の問題について、もう少し詳しく考えさせて頂くことに致したい。沢山の事柄のうち主なものだけに限定して、述べさせて頂くことにする。

1. 「個」の立場と「全体」の立場の相即性について

全体の立場は、人間の言えば「人類」の立場であり、一般的には「類」の立場であると言えよう。また、自然科学的な遺伝子レベルでは、DNAやRNAの分析結果によって知られるように、大昔からの各生物や動物や人間の「種」における生命の連続性が語られ得るであろう。そして、これらの「種」や「類」における各々の立場は、いつまでも世代継承されていくことが望まれるであろう。そのみならず、宇宙の生命や宇宙の意識も絶えることなく連続していくであろうと予想される。これが、諸科学や諸技術の目覚ましい発展の結果としての現状である。しかし、そうであるからといって、個の立場が、無視されて良いということにはならないのではないであろうか。

欧州や日本や世界の各国の文化が示しているように、民衆の各々の「個」の立場は、古代や中世においては、全体の立場と相即的な立場にあるものとは認められていなかった。「汝自身を知れ」と語ったソクラテスにおいてすら、個としての個人は「徳」(virtue)の下位に置かれており、哲学者の徳である「知恵」に徹する結果、個としてのソクラテスはその個としての「いのち」を犠牲にしたのであった。因みに、ソクラテス以来、ヘーゲルに至る西欧の主流の「形而上学」としての哲学(=主客の分離の基礎の上で、主体が一切を実体的に対象化、客観化する立場)は、心身二次元論の基盤の上に成り立ってきた。あのソクラテスにおいてすら、身体は永遠の魂(心)を閉じ込めておく刑務所と見なされていた。この哲学のその後の進展の頂点にある19世紀初頭のヘーゲルにおいても、身体的、現象的なものは、概念化、理念化されて、最終的には捨象(=現象の世界に属し、永遠には属さないものとして切り捨てられること)されねばならないものでしかなかった。

個の立場は、典型的には近世のデカルトにおいて初めて哲学的に認められるに至った。デカルトの「われ思う故にわれあり」は、一切を疑っても、その疑っている自らの「我」を疑わなかったことを物語っている。デカルト以前では、一切は神から出発し、我を疑っても、神が疑われることはなかった。デカルトでは逆に、神ではなく、個としての自らの「我」がすべての基礎に置かれたのであった。その後、この立場は、18世紀のカントによって更に哲学的に補強された。カントは、人間の理性の「自律」(古代の奴隷制や中世までの封建制での「他律」や神を頂点に置く階級制での「神律」でもない!また、現代の日本でも未だ様々の領野で横行している「男尊女卑」の考え方もない!)に基礎づけられた人格の尊厳性を樹立した。カントでは、人間の個としての人格の「いのち」が他者のための道具や手段となることは許されず、個のいのちは「目的自体」であることが理性の次元で哲学的に樹立された。この立場は、その後19世紀のヘーゲルによって代表されるような、最終的には全体(「類」)や社会(「種」)の立場を最優先するような哲学によって消し去られたかのようなのである。しかし、そのヘーゲルに対しては、キリスト教の立場からではあるがS.キルケゴール(1813 - 1855)によって、神の前の「単独者」(人類にも、社会にも、遺伝的素質にも、また個人の誰にも責任転嫁の出来ない、ただ一人で神の前に立つ個)の立場が強調された。その後、20世紀においても、M.ブーバーやP.ティリッヒやH.ティリッヒ(筆者の恩師)等々の数限り無いユダヤ教やキリスト教の神学者たちによって、「類」や「種」の立場と同じ重みを持つ「個」の立場の重要性が語られ、叫ばれてきた。彼らは、第一次、第二次世界大戦で、個が無視され、類や種が優位に置かれた場合の世界や社会や人間の心が如何に悲惨で動物的になるかをその眼で見据え、しかもその悲惨さ、おぞましさを直接自ら身を以て経験してきたからであったと推察されよう。

このような流れの中で、日本の西田幾多郎では、個と世界ないしは個と人類の立場が、共に同じ重み(西田の用語では「絶対矛盾



アガベー(愛)に生き抜かれた谷口財団の故谷口豊三郎社長(向かって右から2人目)。同氏は世界を友情で結び合わそうと、60年余り、18部門での国際会議のシンポジウムを支援された。

的自己同一」)で成立する立場、いわば立場なき立場としての「絶対無の場所」の哲学が樹立されていると理解される。西田哲学においては、個が、つまり個の自己が、無視されないで、どこまでも世界と同じ重みを持ち、世界が個を限定(個の有り方を規定し、変化させる)するのみならず、個も世界を限定(世界の有り方を規定し、変化させる)するような世界が可能である。

2. 宗教と科学・技術の問題

宗教と科学・技術の問題を日本においてだけでなく、世界的レベルで考察し、更にアメリカでのこの問題を考察する対話においては、西田哲学やV.v.グァイツゼッカーやその甥であるC.F.v.グァイツゼッカーだけではなく、アメリカの現代において思想的、哲学的に強力な影響力を持っているA.N.ホワイトヘッド(1861 - 1947)の「有機体の哲学」を学ぶことが必要であった。そのために著者は、49才の時から約12年間程、一心不乱にA.N.ホワイトヘッドの哲学を学んだ。彼は、理系と文系の学問は根本的には、同一の原理によって成り立っていると直観しているからである。また、21世紀にはそのような哲学が要請されると、筆者も考えていたからであった。因みに、同じお考えの、以前に本誌36号で触れたFAS協会の元理事長で、数学者でもあられた故山口昌哉京都大学名誉教授から理系と文系の学問は同一の根源から成り立っていることを、FAS協会編の『自己・世界・自然と科学』(法蔵館、1998)に執筆することを筆者は3年程前に依頼されて、考察したこともあった。しかも、その際の山口先生のご注文は、西田哲学を、その用語「絶対矛盾的自己同一」を使用しないで説明することであった。色々の国際学会で一緒にさせて頂いた山口先生のご注文とあらばと、喜んでそれを試みたことが、今、筆者には懐かしく思い出される。

それはさておき、哲学においてのみならず、19世紀末以来の物理の世界でも、それまでは絶対と見なされていた時間と空間がアインシュタインの相対性理論によって相対的となり、20世紀にはN.ボーアの量子論やハイゼンベルクの不確定性原理によって観察者としての個が微粒子の世界では観察に際して大きな影響を持つことが明白となり、主客の分離の上で主体が一切を表象を通して対象化、客観化し得ないことが分かってきた。



慈悲に生きようとするフェリシモ元会長の矢崎勝彦京都フォーラム事務局長(前列向かって右端)。同氏は、世界の対話を通しての平和の為に、10年以上も京都フォーラム事務局長や将来世代総合研究所を支援され続けている将来世代国際財団理事長。

物理学ではニュートン以後、相対性や相補性等々の主客未分の次元に起源する様々な原理が認められてきているように、哲学においてもカントあるいはニーチェ以後、新しい物理学を踏まえた上で初めて妥当する新しい哲学が樹立されてきている。日本の最初の独創的な哲学者である西田幾多郎においても、絶対的な時間や空間が破られ、因果律(=自然法則の必然性)や根拠律(=どんなものも根拠無くしては存し得ない)が破られた「絶対無」のパラダイムでしか妥当しない哲学が樹立された。西田のこの絶対無の場所の哲学においては、類・種・個のいずれの立場も、それぞれ共に絶対の中心であると同時に周辺でしかない。この場合、類、種、個のそれぞれの立場が、以前に述べた華嚴經のあの「印陀羅網」の各々の宝珠と理解されれば、西田の立場が分かり易くなるであろう。

以上の簡単な説明で述べたかったことは、21世紀においては、類、種、個のいずれの立場も等閑に伏され得ないということである。類・種・個のそれぞれの立場は、相互のバランスやリズムにおける透明な関係の内に成り立っており、それらのいずれの立場が誇張されても、また逆に等閑視されても、世界も社会も個も歪みを来さずと考えられるのである。これは、有史以来の人間の歴史を振り返って見さえすれば、明白である。

同様に心身一如である筈の人間において、心のみが重視されたり、逆に身体のみが重視されると、世界、社会、人間の個にもそれぞれ歪みが生じてくる。他の4つのパラダイム(=相対有、相対無、絶対有、虚無)ではそうでなくとも、絶対無のそれが妥当する絶対の無限の開け(西田の「絶対無の場所」)では、心身一如の人間は死しても心身一如である。そこでは個の心でもある身体が死せば個の身体でもある心は、共に死し、大なる心、大なる永遠のいのち、つまり絶対無(無実体的で、絶対の自己否定の場の開け)へと帰還して行く。脳死による臓器移植では、心身一如の個の身体がバラバラにされ、他己へと部品の如くに嵌め込まれ、同時に個の心もバラバラとなる。そこで、心身一如である筈の個が脳死による臓器移植によって分解されることが他の4つのパラダイムでだけでなく、絶対無のそれにおいても可能なのは、愛と慈悲によってのみと理解されるのである。このパラダイムにおいては、何事にてあれ、^{アガベ}愛あるいは慈悲のみが働く^{アガベ}と理解されるからである。

シャトー・ドウ・シャイイ

日本人事業家の熱意の結晶

横山 弘和

ブルゴーニュのシャトーホテル

ブルゴーニュ地方は、世界でも有数のワイン産地として知られており、日本でもブルゴーニュ・ワインを愛してやまない人々が大勢います。オーセール、ヴェズレー、スミュール・アン・オーソワ、オートンなど歴史的名所古跡、ワインの中心地、ボヌの観光とワイン・カーブ訪問などのお勧めも沢山あります。そのブルゴーニュ地方のほぼ中心、パリから南東に約275キロの美しい田園風景の中にシャトー・ドウ・シャイイがあります。総部屋数45室、うち8室がスイート・ルームのブルゴーニュ地方初の本格的なリゾート型四つ星ホテルです。建物内部は、木の柱、石柱の彫刻、緩やかに昇る古風な階段、独特の建築様式や居住空間、サロンの古めかしい暖炉、中庭のたたずまいなど、歴史に磨かれたシャトーそのものの雰囲気です。

シャイイ・シュール・アルマンソンの歴史

シャトー・ドウ・シャイイが所在する土地、シャイイ・シュール・アルマンソンの歴史を振り返ってみましょう。文献では、シャイイの地名は1180年になって初めて登場します。シャトーは12世紀頃は小さな要塞化された家屋でした。その後、土地の領主は何回か代わり、15世紀に至って小さな要塞は本当の城郭に変わります。それは、当時の統治者ブルゴーニュ大公が勢力のある一族に城の構築を勧めたからです。新しい城には4つの大きな塔があり、城の周囲の堀には吊り上げ橋がかけられました。その後、ブルゴーニュ公国がフランス王国に統合されると要塞化した城はもう必要がなくなります。そして、人々にはもっと装飾のある住み心地の良い館を好むようになっていきました。16世紀に城は、イル・ド・フランスや



横山 弘和 / よこやま・ひろかず
1938年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。
現在佐多商会業務室在籍。

ロワールのシャトーを手本とし、ルネサンス芸術の影響を受けて改築されました。シャトーの外観は当時のままとされており、1931年には歴史的建造物の指定を受けています。

シャトーの所有者は相続されたり、売られたりで何度か代わりました。そして、1889年にシャロン一族が取得し、三代続いた後1987年に現オーナーのものになります。

ブルゴーニュへの熱き思い

弊社社長佐多はフランスの医療機器メーカーとの取引を活発化するために、パリに事務所を置き渡仏を重ねる毎にフランスの歴史や文化への関心を強めましたが、特にブルゴーニュ地方を好みました。実はシャトー・ドウ・シャイイの現オーナーは佐多なのです。シャイイの新しいオーナーに佐多がなったとき、シャトーは見る影もなく荒れ果てていました。その朽ち果てた外壁や内装をその歴史的価値を損なうことなく愛情を込めて再生し、新しい命を与え近代的なホテルに改装しました。1990年のホテルのオープニングには、ロカール仏首相、木内駐仏大使もパリから駆けつけましたが、その際のスピーチで、佐多は次の様に語っています。

1. ブルゴーニュは、文化・経済・交通等が交錯する四辻(カルフル)である。シャトーを軸に多くの素晴らしい人々との出会いの場としたい。
2. ブルゴーニュの持てる素晴らしい歴史と文化、ワインとブルゴーニュ人に息づく真、善、美の魅力を世界に知らせたい。
3. 「新しい精神」(エスプリ・ヌーヴォー)の表現・追求、つまりEC統合の精神を超えて、更に急速にダイナミックに変化し続けて



ドーム・デュ・コスモス



10周年記念パーティ



左から2人目、10周年記念パーティで挨拶する佐多
3人目、経済・財政・産業省政務次官バトリア氏

いるグローバリゼーションの今日を生きていく上での精神的松明
(トーチ)としたい。

瞑想空間「ドーム・デュ・コスモス」

時空を越えた施設「ドーム・デュ・コスモス」は、あらゆる宗教の人々が一堂に会し、宗教儀式を行ったり、自由に瞑想できるエキューメンカルな空間(新しい意味でのチャペル)です。オランダ人アーティストのイレース・ファン・フリーメン女史が、天井に太陽・月・星を、壁面には自然界の持つエネルギーや動き、力、情熱をイメージし、部屋の中心には「生命力の泉」(Fontaine de la Vitalité)を配し、人類、宗教を越えた何か永遠なもの、尽きせぬもののイメージを創造しています。1990年10月4日の開所式には白井永二神主(当時鎌倉八幡宮司兼神社本庁総長)、外山勝志神主(当時明治神宮権宮司、現宮司)他7名の神主とともに、地元のシトー修道院からサンソン修道院長、ベルギーのクレルヴォー修道院からルクレール修道院長、また、ブルゴーニュにあるチベツト仏教のお寺から2名の僧侶が参加され、三宗教合同の非常に荘厳な式が執り行われました。ここでは11組もの日本人カップルが挙式され、またフランス人で洗礼を受けられる方々も出てきています。

10周年記念パーティ

20世紀最後の年となった2000年6月16日に、シャトー・ドゥ・シャイイ、開業10周年を祝う集いが行われました。今では世界各国の賓客から高い評価を得て、安定した経営を誇るホテルになった16世紀ルネサンス様式のシャトーが、近代的な設備のホテルとして開業したのが、ちょうど10年前のこの日だったのです。

夕刻、日本からの招待客ならびに地元の人々をあわせて約350人がシャトーの中庭に集い、当地自慢の発泡性ワイン、クレマン・ド・ブルゴーニュと用意されたビュフェ料理を楽しみました。佐多は、来客にお礼の言葉を述べるとともに、10年前の当日が、父親である故保之弊社会長の喜寿の祝いも兼ねた記念すべき日であった思い出等を語り、来客に感銘を与えました。壇上では、土地のコーラスグループがブルゴーニュのワイン賛歌を次々と披露し、初夏の心地よい西日を浴びながら、祝宴は最高に盛り上がりました。

シャイイの取り持つご縁

私が現役のソムリエとして初めてブルゴーニュを訪問したのは1971年のことでした。その当時の日本におけるブルゴーニュ・ワインの知名度はまだ低く、それから30年後の変化には隔世の感があります。その後、日本におけるワイン消費の増加とともに、ブルゴーニュへは数度仕事の関係で訪れる機会を得ました。しかし、仕事を離れてのブルゴーニュ地方の良さに触れたのは20年以上もたってからでした。1994年3月に、京都大学木質科学研究所の野村隆哉先生を世話人に、民間による日仏文化交流の一環として、わが国固有の「竹文化」を同じ農耕民族であるフランスの人々に紹介し、理解していただく目的で「ブルゴーニュ・竹遊び」が企画されました。それはシャトー・ドゥ・シャイイで開催されたのです。この企画に参加した私は、早春の美しいブルゴーニュの田舎を初めて体験したのです。そして、すっかりシャイイの魅力の虜になった私は佐多社長のお誘いをありがたくお受けして、シャトー・ドゥ・シャイイの紹介のために、佐多商会にお世話になることになりました。

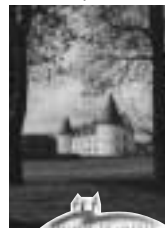
10周年記念パーティでは、日本からのゲストの皆様をブルゴーニュ・ワインの名門ドメーヌにご案内し、地下のワイン・セラーの見学や、新酒から古いヴィンテージ・ワインにいたる試飲などの貴重な体験を楽しんで戴くお手伝いをいたしました。

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世がいまだに息づいている
ブルゴーニュへいらっしゃいませ。
極上の銘酒を生み出すぶどう畑、
グルメレストランの数々、中世そのままの街なみ、
美しく広がる大地や、小さな村々、
豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、
それがブルゴーニュです。

お問い合わせ
(株)佐多商会業務室 担当: 岩沢
Tel. 03 3582 5087

Château de Chailly / シャトー・ドゥ・シャイイ



ホームページ
(<http://www.chailly.com>)